

日本のロマンティック街道

松山⇄砥部⇄内子⇄大州⇄宇和⇄宇和島

水谷 顕介（都市計画家・建築家）▽

「内子シンボジウム'86」まち・暮し・歴史」が10月23日・24日、木蠟（まろう）の町だった八日市の町並保存・修復された内子座（大正4年建築の芝居小屋）で開かれた。町並保存の先進例である高山市長と白川村、地域おこしの沖縄県読谷村など、そしてドイツからローテンブルグ市長を迎えての、参加者400余人の熱心な会議だった。この類の会議につきものの懇親会も婦人連共作の全て町内物産というお料理で盛り上がった。この町を知ったのは、昭和44年と、だいぶんふるい。愛媛県の商店街診断でここを訪ねてきて、当時の道路地図に大江健三郎生誕の地と記載されていてびっくりした思い出がある。

「伝統的建造物群調査報告書」がまとまったのは53年、そして保存地区指定が決ったのは昭和57年4



大正4年建築の内子座

月、八幡浜市総合計画の10年目の見直し作業でここ数カ月間通された内子線で通過だけしていたのをこの機会に下車してじっくり拝見してきたが、あまりにも早いスピードで保存事業が進んでいる。全国町並保存連盟の町並ゼミで内子町並保存会（昭和53年加盟）の同志の積極的なとりくみを聞いてきたが、予想をこえた実績ぶりだった。この波にのせて商業活動の中心地である六日市地区（本町通り）までという町の調査に対し、地元から商業活動への危惧がだされて、町当局に反対の決意書を提出するという事情もおこっていた。

宇和町で、つづいて「木造建築研究フォーラム」が開かれた（10月26日）。わが国で伝統をもつ木造を見直そうという主旨の集まりである。テーマは「木造学校建築」。ここ数年建てかえの可否をめぐる議論のつづいている宇和町小学校を会場にしての時期をえた企画である。木のもつ温かみや木造校舎への愛着、情操教育（児童のお掃除参加など）が語られた。子供達のアンケートでも伝統ある校舎への誇りがたかく、全町の教職員アンケートでも鉄筋コンクリートは100%良しとするのはゼロ意向で構造が

そうなるのはやむをえないとしても仕上げは木ということだったと、当事者である校長先生の興味ある報告があった。宇和町には、藩校となった町民自らが建てた学舎（申議堂）があり、開明学校が残っていて、明治初期、大正、昭和初期と連続した木造学舎が並び、明治6年に文部省が日本で最初に発行したのは五十音、加算と乗算九九、植物や動物図などの掛図がずらりと保存されている。江戸後期、幕末、明治初期の建築物が並ぶシーボルトの娘イネたちを教えた二宮敬作の住居跡、そして高野長英の隠家などをふくめて「宇和文化の里」として大切にされている。木造シンボの前日には、シンボでも発表された最近有名例の一つである埼玉県入間市の盈進学園（設計者は、バタイン・ラングー・在米国）の木造採用の直接のきっかけとなった八幡浜市の日土小学校（戦後まもない建築、設計者松村正恒は当時市の技師で江戸岡小学校などもふくめて材料不足の時期にかかわらずいくつかの秀作をつくった）の見学もあった。

内子でのシンボジウムでローテンブルグの市長さんからも不思議にその話題がでなかったのだが、ここ伊予路は、松山⇄砥部⇄内子・五十崎⇄大州⇄八幡浜⇄宇和⇄宇和島が結ばれたロマンティック街道として、ドイツのそれに対比されるべきである。



●新春さわやか対談

貝原 俊民—藤本統紀子

〈兵庫県知事〉

〈エッセイスト〉

活力あふれる
新たな兵庫へ

—21世紀へ夢を馳せて—

★県知事は番組のプロデューサー

藤本 あけましておめでとうございます。

知事 やあ、おめでとうございます。

藤本 いかがですか、実際に知事に就任されて、いろいろな大変なことが多いのでは…。

知事 そうですね。やはり気分的に緊張しますね。

藤本 知事さんは昭和八年生まれとか。私が九年です。

のでちょうど一年先輩でいらっしゃる。どこかでお会いしてるかも知れませんね(笑)。

知事 やはり年末年始は今までと違いますか。

藤本 生活自体はそう変わっていませんね。年末には政府の予算編成がありまして、国に対していろいろ要望しなければなりませんから、東京にいる日が多かったですね。年始は、あちこちの神社にお願いにいきましてね。欲張りなものですから(笑)。

藤本 でも全国でも随分お若い知事さんなのでしょう。

知事 なりたては誰でも若いんですよ(笑)。二、三年もしたらもっと若い知事が出てこられます。

藤本 昭和生まれが多くなってきましたよ。やはりお若い方が出てこられると新鮮な感じがしますね。

知事 一般的に言えば、若いということにはみずみずしい感性とか、チャレンジする精神、行動力などが感じられますからね。私も頑張らねばと思っています。

藤本 同世代だからじゃないですが、ずっと親近感が増した感じでうれいいますね。

知事 ありがとうございます。ところで、藤本さん、県は一体何をやっているところだろうという疑問はありますか。市についてはもっと身近な感じでしょう。

藤本 そうですね、ゴミの回収とか(笑)。

知事 県は高い県民税だけとって何をしてるんだらうとか…(笑)。

藤本 番組のスタッフに例えるとプロデューサーが県で、市はディレクターって感じがするんですけど。

知事 そうですね。県と市の関係、あるいは県と民間企業との関係もそう言えますね。市や町の力、民間の力が発揮できるようプロデュースするのが県の役割だと思います。プロデューサーは番組には出てきませんし、あまり脚光を浴びることはありません(笑)。

藤本 番組のでもプロデューサー次第ですが(笑)。

知事 そう、責任重大ですよ。

★コートダジュールに似た神戸の“色”

藤本 先程、公館内を見学したんですが、素晴らしい



ですね。旧庁舎を修復されたとか。素敵な財産ですね。
知事 これも兵庫県民がどれほど豊かな心を持っているかということですね。県が公館を持つことが贅沢だという声が多ければ、これはできない。しかしそういう財産を持つべきだという県民の合意があるとういったものができる。言うなれば公館は、兵庫県民の心の豊かさのシンボルですよ。

藤本 本当に随分自分がお金持ちになったような気がします(笑)。それと県庁前のプロムナード。お花がふんだんできれいですね。これも県の政策ですか。

知事 「全県全土公園化」という構想を推進していますね。まあ身近な所からきれいにしていこうということ、そのためには道路幅が多少狭くなってもいいから、ストリートアーキテクチャーと言うんですか、街並みそのものを公園化してみたらというモデルの一つなんです。

藤本 外国に来たような印象を受けますものね。ですから神戸にあこがれる方がすごく多いんですよ。知事さんも昔から神戸にあこがれていらっしゃったとか。

知事 友人が神戸の住吉に住んでましてね。戦後間もない頃ですが、よく遊びに来て、ハイセンスな街だな

と感心していました。最近、神戸の街は南フランスのコートダジュールの雰囲気によく似てきましたね。色は、海の色にしろ、白っぽい土の色にしろもとよく似ていますが、山を背景にした街並み、シャレたムードなども素晴らしくなりました。

藤本 日本海側の方が神戸に来られると帰るのがイヤになるとよく聞きます。確かに街のムードが良くて、温暖で食物が美味しいとすれば、その気持ちはわかりますね。私も神戸生まれで、いろいろ他所にも住みましたが、結局今は西宮に住んでおります。神戸・阪神間はなかなか離れたいですね。

知事 私も長く神戸に住んでいて、息子二人は小学生のときから神戸で育ち、長男は尼崎の研究所に勤務して神戸に住んでいます。下はまだ学生なんですけれども。お陰ですっかり神戸ファミリーです。

藤本 うちは娘二人でしてね。主人(藤本義一氏)がやっぱりかわいくって仕方ないみたいです。

知事 うらやましいですねえ。うちは男ばかりで色気のないことおびたらしい(笑)。

★スクールカラーが出る個性的な教育を

藤本 兵庫県は教育県でその熱はすごいですね。有名私学も多くていいわねとよその方からは言われますが、格差の問題もあるように思います。

知事 私は基本的には、いろいろな学校があってよいと考えています。特色のある教育をされている私学が兵庫県には多いんですが、そのような個性を公立の中学、高校といった公教育にも持たせたいですね。昔の旧制中学・女学校などにはスクールカラーがありました。戦後、できるだけ平等にということをやってきて、カラーがなくなってしまうだけです。

藤本 スクールカラーはある意味で人間のカラーになってきますものね。

知事 そういうことですね。県としては公教育でもそのスクールカラーをだしていききたい。特に高等学校。これは

前の坂井知事が非常に力を入れておりましたが、美術科とか演劇科といった特色のある学校を設置しているということ、現に設置された学校では評価が高いのです。これからも引き続き力を入れていこうと思っています。

藤本 そういえば、家の近くに県立西宮高校があつて音楽科ができていますが評判は良いですね。

知事 進学率が高くなってきましたので公立高校もたくさんつくりましたが、これからは量より質の時代になっていくでしょう。県としても、子供達の創造的な個性を伸ばすように、より質の高い公教育を目指し、活力ある人づくりを考えていきたいと思います。

藤本 そうですね。没個性の間ばかり増えても困りますもの。

知事 今の教育には競争がないと言われる方もあります。私学はそれぞれに学校の特色をもっておられて、それにあがれて生徒が入学してくるよう努力されていますが、公教育はそういう努力をしていないんじゃないかとね。だから、そういうところでは教育の活力がない。しかし、これからは生徒数も減ってくるし、うかうかとはできないですよ。うちの学校ではこういうことをやっているんだという主張がありませんとね。

★これからは知恵と工夫の時代に

藤本 それはそうと、知事さんは大変お酒が強いと伺ってますが(笑)



知事 そんなに強くないですよ。藤本さんこそお強いんじゃないですか。

藤本 いえ、そんなことないですよ(笑)。灘はお酒で有名ですね。よくお酒はその土地の食べ物に合っていると

言われますけど、知事さんのお好みはいかがでしょう。

知事 私はやはり和食の方が好きなもので、飲むのは日本酒になりますね。以前、農林部長をやっていた時に酒米振興会の会長もやってましてね。『山田錦』という灘にしか卸さない特上の酒米がある。兵庫県の農業試験場が開発した品種なんです。

藤本 あっ、知ってます。近所の酒屋さんがすごく欲しがってました(笑)。

知事 オイルショックの後、景気が悪くなって、お酒の消費が落ちましてね。酒米は他に回せませんから、これじゃいかんと私も宣伝に一役買って、必然的に日本酒を飲まざるを得なくなつてね(笑)。それが私がお酒が強いと誤解される所以なんです。

藤本 ところで、神戸市はワイン工場も造っていて、「神戸市株式会社」とか言われますが。

知事 これからは民間活力の時代と言われています。社会全体が貧しい時は、政府が強制的にその少ない富を集めて公平に配るといった強い政府が必要ですが、社会全体が豊かになると、政府は少しひっこんでもらって、自分たちの力でできることはやりますよという時代になりますね。何でも役所がやるんじゃないって民間でできるのじゃないか。また、役所も民間と同じやり方でできるのじゃないか。そういった手法を神戸市がやってみせたというのは素晴らしいことです。役所の専売特許と言われる福祉部門にしても福祉サービス産業というものが出てくる。サービスをすべて税金でやるのではなく、質が高くて心のこもったものを自分達の意思と力でやる。もちろんすべてではな





いですが、いずれにしても知恵と工夫、センスがものをいう時代になると思います。
藤本 そういった知恵とかセンスを

柔軟に取り入れてお手本を見せたのが神戸市じゃないかと思えますね。

★関西復権の基礎となるビッグプロジェクト

藤本 今後の計画などについてのお考えは…。

知事 まず、関西新国際空港、明石海峡大橋、湾岸道路といったビッグプロジェクトですね。世界的に見るとこれからは環太平洋の時代です。大阪湾を日本の門戸とし、関西復権の起爆剤になるプロジェクトだと考えています。また、神戸港沖に空港を造ってはどうかとか、神戸・阪神間にディズニールランドに匹敵する施設を造ったり、音楽祭などの国際的なイベントをやってはどうかとか、いろいろありますね。もう一つは技術開発です。これだけのステイタスを持ちながら日本は時間とお金と人材が必要な基礎の分野に貢献していないではないかと諸外国の不評をかっていますね。たとえば、ノーベル賞の自然科学部門の受賞者はこれまで約三百七十人出ているのですが、日本人はわずか四人なんです。経済力がありながら日本は外国で開発された技術を使って、もうけることばかりやっているといわれたいためにも、今後は技術開発にもっと力を入れねばなりません。そのためにも、関西全域に研究施設を複合的に組織していこうという計画があります。

藤本 確か阪神間にもそのような施設ができるとか。

知事 アメリカのトライアングルリサーチパークのようなものができる予定



です。兵庫県は日本一のゴルフ場県ですが、それだけ自然環境に恵まれた広い土地があるということです。しかも、大都市からのアクセスも整備されている。これは非常に大きな財産ですね。六十三年には丹波に近畿自動車道舞鶴線が開通しますし、先端技術関係企業とか研究所が進出するのいうってつけなんです。その一つとして西播磨地域に世界的規模のテクノポリスを建設する予定です。先端技術の研究開発のメッカになると期待しているんです。

藤本 私は堺に住んだことがあるんですが、コンベナートなどがあるため、海からの快い風が大阪に入らず、あれだけ暑くなったんじゃないかと思うんですね。もっと湾岸を大事にしないと。奈良とかも含めて、関西として各県が協力して環境を造っていかないと…。

知事 ええ。これは神戸・阪神間のテーマの一つですね。原材料を船で運んできて、製品を船で輸出する産業は、ニックスと言われる中進工業国に移行しています。高度技術化が進むと船より飛行機ですから、臨海性は有利ではなくなってくる。そうすると臨海部に用地があいてくる。その土地を生かして、例えば西宮・芦屋沖を大ヨットハーバーに再利用する計画が実現にむけて進行中です。

藤本 さて今年の取り組みは…。

知事 早急にやらねばならないのは、やはり人づくりです。国際化、高齢化が進むにつれ、外国人と日本人が、あるいはお年寄り若い人が仲良くやっていかねばならない。幸い兵庫県には教育の専門家が多くのいるので人づくりフォーラムを開催しようという計画です。今やっておかねば間に合わない焦燥感さえあります。それと、六十三年に開催

する「北摂・丹波の祭典」や「全国高等学校総合体育大会」の準備もしなければなりません。いろいろと多忙な一年になりそうです。〈文責編集部〉

“神戸学”事始め

神戸の独自性を生かして、 市民が参加できる研究を

米花

稔 〈神戸大学名誉教授〉

尾上

久雄 〈京都市名誉教授〉

田口

寛治 〈神戸大学教授〉

水谷

顕介 〈都市計画家〉

——神戸は来年開港120年を迎えます。この間、近代都市として発展して来ましたが、産業ひとつ見ても今や構造的な変革が迫られています。21世紀を指呼の間に見る今、改めて“神戸”をテーマに学際的立場からのアプローチ、いわば神戸の研究ネットワークづくり、“神戸学”の確立が必要だと思われます。

そこで、(1)神戸の独自性、(2)神戸を対象とした研究テ

ーマにはどういうものがあるか、(3)研究の方法論などについてお話をいただき、本誌誌上におきまして“神戸学”を提唱したいと考えております。

神戸は歴史的にも独自性を持ち続けている町

米花 神戸学を考えるに際して、まず神戸の独自性はどこにあるかということなだけんど、開港以来の神戸の120年の歴史は大変ユニークなものだったという点に着目したいですね。20年前に市から頼まれて「神戸開港100年史」というのをつくったときに、神戸が他とは違うという、いくつかの特徴がはつきり出てきました。私の神戸学は、それが原点なんです。なぜ、大阪でもなく京都でも東京でもないかというのは、神戸の歴史が内外からの多様な主体によってつくりあげられたことにあります。全国の各地から、また外国からいろんな人がこの神戸に集まり、その時代時代の様々な問題に創造的に取り組み、そして創造的なシステムを生み出してきた。そしてさらに大事なことは、そういう人々たちを世話する裏方の

米花 稔 さん





水谷 頤介 さん



尾上 久雄 さん



田口 寛治 さん

存在が常に神戸にはあったということです。

こういった、120年の歴史の特性が、神戸学への一つの手掛かりとなるでしょう。

尾上 神戸は、独自性というものがいろんな形で明示的に証明されている町です。神戸ほどアイデンティティのある町は少ない。これは理屈ではなく実感として思うことなんです。

よく、秋田には秋田美人とかいって、その土地の顔があるけど、神戸の場合、「神戸らしいお嬢さんだなあ」と思うのは、顔じゃなく、センスの近代性や国際性にあるんですね。文化とか後天的なものによってアイデンティティを創りあげたということは、神戸の偉大な点でしょう。

神戸学という学が成立しうるためには、そのアイデンティティを持っていないといけない。そういう意味でも神戸学へのアプローチには賛成でよし、またそれによってますますアイデンティティが確立されればいいですね。田口 私は「神戸学へのアプローチ」というテーマを聞いて正直言って、感慨無量でそして胸が躍るような気分になりました(笑)。というのも、10年前の昭和52年に、市の広報誌で神戸学をテーマにした随筆を書いたことがあるからです。まずはその文章を読ませていただきたいと思います。

「20年ぐらい前に神戸在住の大学関係者数名が集まって、神戸研究会をつくろうと相談したことがある。大学関係者なのでそれぞれの研究領域を持っているのは当然ですが、それとは別にむしろ別の領域を持っているからこそ「神戸を考える」という共通のテーマで話し合いを続けてみようではないかという主旨です。夢はふくらみ、研究所にしよう、将来は神戸学会をつくろうと。だが様々な理由、何よりも会員たちの無精のため、たんなる夢に終わりました。

神戸は文化不毛の地といわれています。そういう面もあるが、逆に専門研究者たちが地元に関心であること

が、不毛の原因の一つだと思ふのです。特に大学陣の場合、自分の出身校の所在地（主に東京、京都）を心中秘かに第2の故郷と考え、神戸は仮の住まいという意識が強いのです。仮の住まいなら仮の住まいでも、とにかく住まわせてもらっているお礼に、何か自分で行きたくて提供してもいいのではないのでしょうか……」

という文章なんですけど、それが実に30年以上経った今、実現されることになれば本当に嬉しいですね。

水谷 神戸の町を他の町と比べると、ラッキーなことに明治以降、断絶がないんですね。大阪などは戦前と戦後で随分変わっています。神戸の場合、それほど落差もなく持続してきました。そういう背景があつて、神戸が幸せな町だといいますが、その神戸を、みんなが素直に幸せとして繋げていくのか、また、そうじゃないよ、町というのとはもつと違う要素があるんだよという見方をしていくか、そういう肯定的な見方と否定的な見方の両方が必要だと思ふんです。どこでも自分の町の長所は誉めたるけど、それに溺れていては駄目。客観的な物の見方で神戸学を考えていくことが大切ですよ。

米花 戦争による落差がないというのは、国立民族博物館の梅棹忠夫館長が「あのモダンイズムさが現在まで繋がっている、たまたま10年（戦争中）が抜けただけ……」と神戸のことを言っています。

神戸は初めから、綺麗事ではない問題を持ち続けてきました。そして、いろんな所から来た人の思慮により、それを解決して来たことの方法の蓄積が、共通して今日の神戸でいかされているように思えます。神戸を考える場合、その歴史を見て、未来に繋げていくことです。

尾上 もう少し話を具体的に言っていると、藩の時代と同じく軍の時代があり、どこの土地でも特徴の発揮の仕様がなかったのです。神戸には外国人がいて、国際性と、反封建性というか非軍国主義みたいな風潮があり、ハイカラな雰囲気を持ってきました。戦争が終わって、また自分たちの町の時代が来たと、水を得た魚のごとく、さら

にモダンイズムさに磨きをかけたのです。

水谷 ちょっと先生方にお尋ねしたいんですが、昔はいろんな町ごとに旧制高校、帝国大学があり、それなりに外の土地の人たちが、その土地を求めて行きましたね。旧制高校、帝国大学があつた町と、神戸の町とに違いがあつたんでしょうか。

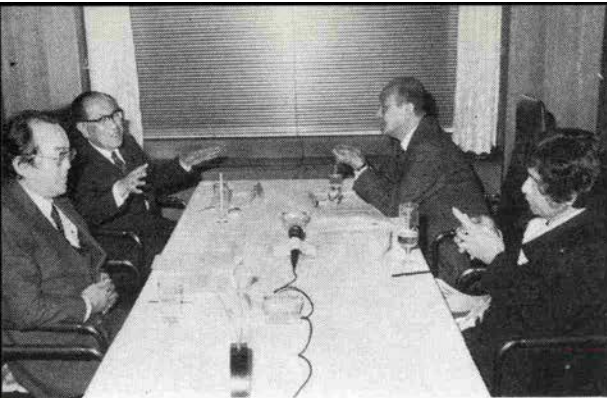
米花 神戸は就学率が悪くて、他と比べたら教育が劣っていました。なぜかと言えば、全国からいろんな肩書きの偉い人たちが来て街づくりを始めたでしょう。自分のところで教育しなくてよかつたんです。それじゃあということ、外国からキリスト教や一方では、仏教関係の学校が出来始めました。

田口 神戸大学医学部の前身が県立医大であつたことは誰もが知っていますが、その県立医大の前身は何だったかといえば、話は明治2年まで遡って、今の下山手通の辺りにあつた神戸病院という半官半民の病院が前身ということなんです。この病院には後藤象二郎、伊藤博文、井上馨らが寄付しています。遠く関係のないと思つていた人たちが我々の足元をつくつた人だったんです。そういう歴史の繋がりが、今の神戸にはあらゆる所であるんですよ。

米花 神戸にはお金がなかつたので、播磨や大阪、京都東京あたりから人とお金を調達してきた。何もないところからどうするか、苦勞しながらやってきたからこそ、いろんな知恵がそこから生まれてきたんです。これこそまさしく神戸の特徴ですね。

尾上 明治以降の学問の主流は、旧制高校、帝国大学だったわけだけど、横浜、下関、長崎、小樽などの港地はみんなそれがなかつたですね。旧制高校、帝国大学は基本的には藩校のあつた場所にあります。神戸の持つ反封建というか非封建の精神にはそのことも影響していると思います。

私の父の母校、姫路中学の昭和10年頃の同窓会誌に載ってましたが、日本近代国民国家の象徴である「君が代」



神戸学を語る口圓にも熱がこもる

第三に、自然との調和が必要であること。六甲山や海があり恵まれてはいますが、今後それらをもっと大事にしていくようにすべきでしょう。第四は、極めて多様な価値観を持

を開校当時にはまだ生徒たちは誰も知らなかったのに、神戸からの生徒だけが知ってたらしいんです(笑)。

港のある町には高等商業学校ができました。反対建的な近代的な発想は、商業学、貿易学からなります。神戸大学の経営学、商学が秀れているのはそういったことからです。そこにも神戸というのが、貿易・商業と共に知的で学問的なものが生まれてきた町であると言えましょう

これからの交流時代にふさわしい排他的気風の無い町田口 これからの都市の発展の方向みたいなのを、極めて一般論的に言うのと、現代の都市である限り最低限満たさなければならぬ条件があると思うんです。

まず第一に、中国の地方行政のモットーである「七つの保証」つまり、食料・衣服・住居・健康・教育・老後の生活・葬儀の七つが満たされているか。神戸の場合、七つとも充たされてますね。そこからその都市は次の段階へということになります。

第二に、第一次、第二次産業を第三次産業に切り換えていくこと。第一次、二次産業と都市との共存は無理です。神戸市はファッション都市を提言し、これもある程度実現しています。

第三に、自然との調和が必要であること。六甲山や海があり恵まれてはいますが、今後それらをもっと大事にしていくようにすべきでしょう。第四は、極めて多様な価値観を持

った市民が、緩い統一を持ってお互いに伸びていき、共存共栄すること。神戸は人種多様・文化多様、こんなに緩やかで共存共栄させているところはない。そういう意味で、ここを研究していくことは、神戸を次のステップに持ち上げていくことになると思うんですよ。

米花 主体が多様であるということで、この10年20年、行政主導にならざるを得なかった。地域の主体が積極的になって、もう一歩エネルギーを出すことが望まれます。水谷 今、高等学校の教育を見ると、すごく単純ですね。灘高を例にとれば、受験教育しかしていない。日本一だと言って全国を歩き回る校長ははずかしい(笑)。その校長をよく知っているから言えるんだけど。灘高の卒業生がどうなっているのかというのを、もっと知らないといけない。兵庫県や神戸市には、第一次、二次産業に対する教育体系だけがあって、第三次産業の教育がありません。自由なる精神に対する教育がない。最近、演劇科や音楽科を設けた学校ができたけど、そういうことを理解してやっているのか、それとも、世の中がそうだからうちもやろうかというだけなのか、その本質の見極めがどうなのか疑問です。

米花 弁護するわけじゃないけど、取り組み方については基本的な考え方が背後にあると思いますよ。

水谷 でも一般の市民には、やはり灘高至上主義というのはわからない。灘という問題は、日本の高等学校の制度上の歪みの間隙をぬって出来たんじゃないかな。

尾上 今の灘高というのは、神戸の本質とはあまり関係ないんじゃないですか。「神戸イズノット・レスボンシブル・フォー・灘」です(笑)。学校の話はこれぐらいで。

神戸は昔から物的交流に伴い、いろんな情報を取り入れてきた町です。しかし、これからは情報が常に物的交流にくっついてきたという時代では段々なくなってくるでしょう。今までの神戸の交流の伝統を利用し、発展させながら、物理的制約を越えた情報の交流に移ってこなければいけないでしょうね。

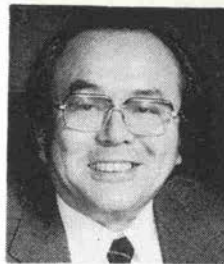


米花 稔さん
「神戸を考えると、この120年の歴史を見て、未来に繋がっていくことが…」

米花 確かに神戸は、特定の主体がなかったせいか、交流が盛んで、排他的気風のない町でしたね。これからの交流時代にふ

さわしい条件を持っている町です。せっかくそういう伝統があるんだから、町が大きくなったからといって、閉鎖的社会をつくらないようにして欲しいです。

水谷 今、神戸の問題点は、神戸が他の町の世話をあまりしていないことです。外へ出かけていく要素が少ないこれは客観性を失わせてることに繋がります。いいものは全部自分のところに入れるのはよくない。いいものを他所へ渡してその土地が発展し、そこで生まれたものが自ら神戸に集まってくる、そういうやり方をしないと…。



尾上 久雄さん
「後天的なものにより、アイデンティティを創り上げたのは、神戸の偉大な点」

か弁償をしていかなくてはならないでしょう。その主体になるのは、行政ではなく我々市民なのです。海が哭いていると言

神戸は何が何でも六甲山。自然の恵みを生かしたものに尾上 これから、何を対象に研究を進めていくかという中で、自然地理学、生態学というのも大切だと思うんです。先程、田口先生がおっしゃっていた自然との調和ということ、自然を人間の価値観の変化（多様性）と結びつけないといけない。経済成長を謳ってきたのが、ある日突然、環境破壊をしている自分たちに気が付いた。具体的には、ポートアイランドがそうでしょう。あの人工島は確かに素晴らしいが、同時に自然をも変えてしまったのです。これからは我々が自然に対して補償という

いますが、あれは人間が泣いているのです。しかし、瀬戸内海のこの辺りで、海水浴ができるのは須磨だけであるという事実は、誇れることですし、こういう神戸が持つ自然の誇りを、どんどん拡大していかなければならないと思うのです。

米花 昔、六甲山は禿げ山だったんですね。それを明治時代に植林してきて現在のようになったんです。そういう歴史を持っているのです。神戸の町は、いつも自然に教えられてきました。あの阪神大水害のように、ちっとと油断したらすぐ自然からしっぺ返しされる。絶えず自然から見つめられているのです。

田口 六甲山を全部セントラルパークにする話はどうなったんですか。早く環状線をつくって、神戸の町がドーナツ型になるような方向に持っていきたいですね(笑)。

水谷 神戸は六甲山、広島は川、福岡は博多湾というように、同じ港町で、同じような状況なんだけど、自然に対する基本的なテーマが違うんですよ。神戸は何が何でも六甲山(笑)。六甲山ほど日常生活に密着しているものはない。六甲山の持つ意味は大変大きいと思いますよ。

米花 神戸は20分どこにでも行けるからね。山にも海にも、繁華街にも、そして温泉にでも…(笑)。

尾上 私が京大に20年間居ながら、ついに神戸から住居を移さなかったのは、まさしくそれですよ(笑)。

水谷 また学校の話に戻りますが、今の新制高校をもっと地域的な色彩をもつものにしていけないでしょうか。大学というのは、現在の進学制度、教育体系が残っている限り、地域的な色はなかなか出てこない。例えば、履歴で、東大卒とか京大卒とか書いてあるのを見ても、入学試験でいい成績をとったのかなあと分かるだけで、その人がどういう性格、どういう地域に触れて育った人かなんて全く分からない。私が最近主張しているのは、新制高校の卒業校名を書くことで、その方がその人の育ちなどがよく分かる(笑)。そういう意味で、高等学校をもっと地域らしく、誇り高くしていくことをみんなで考えな



田口 寛治さん
「神戸はここ10年ぐらい突っ走ってきたけど、研究のために一服期間も必要」

いといけないと思
うのです。

田口 よく、産学
共同というのが言
われているけど、
私は新学共同であ
ればいいと思うの

です。つまり、新聞と学校ですね。新聞と大学の先生方の接触があまりないですから。

尾上 アカデミズムの良いところは、本質的であること。欠点は時間性に欠けている。逆にジャーナリズムは時間性はあるけれど本質論がない。神戸学の学は、まさにそれを結びつけたものにならなければいけない。

水谷 この前、山陽新聞が岡山大学の先生を一日一人ずつ、全員紹介していました。こういった一般の人と先生方のコンタクトをもっと欲しそうですね。

尾上 ここ5年くらい、私が密かに須磨に住んでいたのを誰も知らなかった(笑)。

水谷 殆どの人が知らないですよ。新聞の死亡記事を見て初めて、この人神戸に住んでいたのかと、分かる(笑)。神戸学は、市民が参加できることが大切です。

例えば、こういう研究テーマがあり、こういうメンバーでやりたいというのを自己登録して、企業や行政が好みの学問に資金を出すという、テレビのスポンサーシップのような、自由なネットワークで繋がればいいと思います。組織や企業や行政が先行するのではなく、あくまで市民の手によるものです。



水谷 順介さん
「市民が参加できる、自由なネットワークづくりをするのが大切」

尾上 今は何でもが東京に集中していますが、神戸の企業が中央志向では困ります。たとえば、それが支社や支店であっても神

戸との結びつきはあるわけです。産業界は地域への貢献を考えないといけませんよ。その意味でスポンサーシップは大切でしょうね。

米花 スポーツに限らずいろんな世界で、アマチュアセミプロ、プロというのがあります。アマチュア、セミプロだけでは、もう一歩足りないし、プロだけでは、現場の事情が分からない。アマチュア、セミプロ、そしてプロとの関わり合いがうまくいけば、相当な成果が期待できると思います。そういった関わり合いができるための仕組みを、いろんな分野で持つ必要がありますね。

水谷 ユニークでおもしろい研究をしていても、目の目を見ないものがたくさんある。そういった仕組みをつくっていかないと、本当の神戸学ができてこない。

それともう一つ。いろいろな知識を持っておられる先生方と若い人との触れ合いの場が欲しいですね。たとえば米花先生が退官されると、なかなか会うことができない(笑)。大学にそういう場があつていいと思います。

田口 市民の声を聞くためにも「ハガキで参加できる神戸学会」というのもいいですね(笑)。毎回テーマを出し、まあ初めのうちは自由テーマでもいいから、いい意見には賞金を出すとしまして。

とにかく神戸は、ここ10年ぐらい突っ走ってきたけれど、ここらで一服期間をおいたらどうかと思っています。学問は暇がないとできないですよ。そこからまた、神戸学の基本的な線がいくつかでてくるように思うのです。

——「神戸学」を始め、提唱するべく先生方よりご意見をいただきました。非常にご熱心なご討論をいただき、なお更に具体的な方法論までご明示を下さいました。本誌では早速、行動に移すべく各方面にいろいろな協力の要請を行いますので実現に向けて活動を開始いたします。ご関心をお持ちの方がございましたら、編集部にご連絡いただければ幸いです。

(文責・編集部)

(レストラン ブランドゥプランにて)

□特集／「神戸学」事始〈2〉アンケート

本誌は「神戸学」について学術・経済・文化各界の方々に次の項目によるアンケートをお願いいたしました。

1. 「神戸学」についての「感想ないしは、ご提案などがあればお聞かせください。また、こういった地域を対象とした研究の例を他にご存知でしたら、国内外を問わずお教えください。
 2. 神戸を対象とした研究テーマのネットワークづくりを実現する上で、a、これからこういう研究をめざしたい。b、これまでこういう研究をやってきた。c、これからの神戸にはこういう研究が必要だ、という諸点についてのお考えをお聞かせください。
 3. ネットワークづくりを実現するための具体的な方法には、どういうことが考えられるでしょうか。
- 以上についてご回答をお願いします。

★神戸研究のデータ・バンクを



新野 幸次郎

△神戸大学長▽

1. 地域「学」というと大げさですが、地域研究は国際的に国規模または国際規模でも、また、一県一市町村規模でも従来から行なわれてきましたし、現に行なわれています。神戸についての諸研究・諸施策論は、明治以来、きわめて多数累積しており、それを「神戸学」などと言うとすれば、その意味ないし意義を十二分に整理して発言することが必要でしょう。神戸学がたんなる神戸肉、松阪肉と並ぶような発想では面白くありません。

2. 神戸に関する諸研究のネットワークづくりのためには、どこかで一度神戸についてのいままでの業績のデータ・バンクをつくり、いままでの神戸についての分析的

ないし政策的着眼点の優れている部分とか欠けている部分とかを洗い出してみることが必要でしょう。そのためには、しかし、ただ漠然とスタートするのではなく、何のためにいまさら神戸の地域研究を総点検するのかを、市民の各階層、この中には、地域別、年令別職業別、産業別等々多様な観点を含んである程度まで掘り下げて議論をして、論点を整理することが望まれる。これは、近づく市政の一〇〇周年などを目指して、市で世話をするか、もしくは、市は懸賞金を出すにとどめて上述の各階層の意見を聴取するためにも広汎に（たとえば、小学生、中学生、高校生などを夫々区分して）論文募集するのも一案であらう。

3. 以上は事実上、ご質問の2と3とを一緒にしたような回答になっていると思います。

★「ジャンクシオン・カルチャー」のすすめ



山口 光朔

△神戸女学院大学長▽

正直にいつて「神戸学」という言葉自体には、いささか抵抗を感じる。というのは、最近はやりの「女性学」とかなんとか同じく「学」という字が付くと、なにかお固い感じがするからだ。だが、神戸という地域の歴史や文化や経済などを大いに研究するということ以上に、神戸という土地柄を大いに地元の人びとのみならず、全国の人びとも知ってもらうためのラブ・サインとでもいう意味において、「神戸学」の提唱は大いに賛成である。もともと、これにはかの「女性学」が women's studies といわれているように、あくまでも Kobe studies という複数かつポピュラーなものであることを前提とした。

アカデミックなものとしては、アメリカの大学でさかんなethnic studiesに環境問題の研究を加味すればりっぱな地域研究となることなどを参考として、「神戸学」もそのような総合的研究になることを期待したいものだ。

もともと開港場として発達してきたコーベの近代的国際港湾都市としての文物・風俗を中心とした「神戸学」とともに、歴史的な兵庫や須磨・明石をも加味した「神戸学」というものを考えると、その焦点は、おのずと地理的な「ジャンクション（乗り換え点ないし接点）」としての神戸の役割ということになる。瀬戸内文化と畿内文化ないし上方文化、外国文化と日本文化などの接点として過去・現在・未来にはたす社会的・文化的・経済的役割を研究するの、「神戸学」というものの課題である。そのことをとおして、神戸の未来への展望も考えられよう。

私ももう六〇歳である。神戸に生まれ、神戸に住んで六〇年ものあいだ神戸が育ててきた独特の「ジャンクション・カルチャー」にどっぷりとつかってきた。これを研究するのも、いわゆる「神戸学」★主體的な地域発展の方策を探る



鈴木 謙一
△経済評論家△

一、シカゴ大学の社会学の分野でアクシオン・リサーチという手法があるようだ。つまり、地域の問題を単に客体として研究対象にするというだけでなく、市民自らが主体となつて、その地域の改善の方向を探り、自ら問題を提起するというものだ。シカゴ大学の場合、シカゴの黒人のスラム街についての手法を用いたという。神戸学も「横ならび」のアーバン・スタディーだが、こうしたアクシオン・リサーチの手法を採り入れ、主體的な地域発展の方策を探るものにすべきだろう。

一、神戸は伝統的にその時代、時代の新しいライフ・スタイルを生み出してきた。いわば日本の生活文化産業の一つの中枢地域である。都市と文化と産業の相互関連性をさらに深く追求することにより、ファッショ都市、コンベンション都市として個性豊かな発展に資すべきだ。

一、情報交換の場をできるだけたくさん持つこと。それ自体、コンベンション活動だが、市民同士の交流はもとより、国際的視野に立つて広はん人々との交流の場を持つこと。そして多方面の情報蓄積を図ること。

★まず「神戸学会」をつくる



岸本 通夫

〈財)市民同友会理事
学校法人玉田学園理事〉

A1、

今や、西は垂水区・西区を含み、東は芦屋市に接する現在の神戸市の地域は、すでに縄文・弥生時代の昔から、豊かな一つの文化圏を形成していたのではないだろうか。類例の有無などあまりこだわらず、とにかく始めてみることにしたいと思います。

A2・b

私のやった仕事ではありませんが、落合重信さんが先に立って仕事を続けて来られた「歴史と神戸」という貴重な蓄積があります。これは今後のために、少くとも一つの基軸となるべきものと考えます

A2・a・c

次項A3の答えで具体的に申し述べましょう。

A3

(i) 方法的にはやはり、まずはライシャワーの地域研究をモデルとして、都市圏という小型文化圏のArea Studiesを試みてみるべきでしょう。やっているうちに神戸市程度の都市がArea Studies上の一単位たりうるか、拡げると

すれば、地域的にどの範囲まで拡げればよいか、などが見えて来ましよう。

(ii) また「歴史と神戸」の蓄積をもとに、これに加うべきものを加えて行くことも併わせ考うべきでしょう。

(iii) この際、多くの通例とは反対に、まず学会を、つまり「神戸学会」をつくることから始めてみてはどうでしょう。そんな例が皆無なわけでもない——「地中海学会」・「比較文明学会」といった例があります。

★神戸芸文は、神戸学的一大集団



服部 正

△神戸芸術文化会議議長

1、例えば日本学と欧米からいわれた時、それは未知、未解読いわけ謎の部分の多い、神秘的ともいえる語感がありました。アラビア学などという時と同じです。沖縄学とはいつても、東京学などといいませんね。その意味で、神戸学と呼称せねばならぬ程、地方性を強調する必要がありますでしょうか強いていえば神戸考現学ですか。何となく、田舎臭く感じますね、神戸学などといわれると……。

神戸学派となると次元が異なります。我田引水ながら神戸芸術文化会議の学術部会など、まさしくそれそのものです。

2、b、かつて私が編集兼発行人だった「労働研究」（一〇〇号ほど）は、神戸中心の労働問題研究の舞台でした。

c、影の部分を凝視することによって、光の部分を浮き上がらせる意味で、神戸の都市病理にメスを入れるべきです。村岡伊平治から本多会、山口組の興亡まで、なぜ、暴力団が神戸に？——というような問題と取り組むべきです。

3、既に十五年をかけて神戸芸術文化会議28ジャンル、八〇〇人の芸術家、学者、文化人のプロ集団のネットワーク作りに営々と努力して来しました。どうしても神戸学を呼称するなら、これぞ神戸学的一大集団であると私は主張します大いに交流、活用して下さい。

★「神戸の市民性」を研究課題に



田中 國夫

△関西学院大学教授

私自身、神戸市に関する研究、調査について今まで行ってきたものに次のようなものがあります。

1、神戸市民の政治意識と投票行動

2、神戸市民の教育に関する意識

いずれも神戸市民を対象とした比較的大規模な調査研究でした。

前者は国政・（市政）レベルの選挙のたびに行ったもので、神戸

市民の政治に関する意識と行動の推移を知ることができるのです。後者は教育に関する市民意識をかなり詳細に解明したものです。

この他に私自身、直接、研究をしたものではないのですが、国連の人口部門にいる友人との関係と私自身のその研究への興味から大規模な国際的協同研究の組織化のお手伝いをしたことがあります。

神戸市の研究の主体は神戸市都市問題研究所となりましたが、研究はポートアイランドの解明に当たりました。すなわちこのポートアイランドプロジェクトの発生から完成にいたるまでのプロセスの解明、そしてその完成とともにこのプロジェクトが引き起こした経済的社会的効果の分析です。これがシンガポールやその他の国の開発プロジェクトと比較して検討されたものです（昭和60年5月ポートアイランド国際会議場にて）。参加した国はアメリカ、韓国、インドネシア、シンガポール、タイ、中国などですが、専門は経済学、社会学、政治学、財政学、土木学、社会心理学と多彩で大変刺激的なセミナーでした。ポートアイランド住民の社会的、社会心理学的な研究の展開が今後、期待されています。

現在、私が取り組みたいと思っているプロジェクトは「神戸の市

民性」に関する研究です。ユニークな社会的性格をもつといわれる

ものの特徴とその発生のメカニズムについてメスを入れた다고考えています。他の多くの領域の方々と共同して研究するとより興味深い成果が得られるものと思っています。

「神戸学」というものは多くの角度からの神戸市と神戸市民に関する研究でできあがると思います。そんな研究討論の場ができることを大変に期待しております。

★「民官学」共同による
研究推進を



水野 進

△神戸大学農学部長

明治以来貿易港として発展した神戸市の文化、経済は、他都市にみられない古くて新しい特有のものである。また産業界では、すでに工業化が飽和状態に達し、他県にみられる様な工業開発よりむしろ日本の代表的な高度文化経済地帯作りを志向する方向に進むのではないかと考えています。

神戸港のポートアイランド、六甲アイランドに建設されているコンテナターミナルは、世界第一位の規模を持ち、我が国生鮮食品総輸入の約半分を占める特徴ある貿易港であるとともに、バックに我が国食品工業生産高第二位を誇る

産業地帯を有する大物流基地でもあります。又海岸部の重工業地帯では、各企業の新産業への革新開発も活発化しています。これら食品産業、輸出入を主体とした港湾関連産業、更には人工島の将来計画等は、他の都市にはみられない神戸特有のものであり、21世紀の飛躍、発展にむけて各分野が協力、活力を集中すべきではないかと考えられる。同時に輸入の大半をあつかう神戸としては、国際収支の面から開発途上国自体の産業技術開発にも心がけるべき使命を持つものであろう。

現在神戸大学では、新しい時代に対応すべく民官学共同による先進的研究、新開発技術の場（神戸大学共同研究開発センター）が実現しつつある。ここでは、各種産業界、企業と大学及び県、市が一体となって産業技術の振興に寄与することを目的としている。一方市では「神戸産業振興会議」の設立を計画し、21世紀に向けて自然科学及び人文科学両面にわたり望ましい産業、そのための産業振興のあり方も検討されている。両者の意図しているところに多少の違いはあるが、最終目的は同じと考えられる。したがって両者の計画をうまくドッキングさせ、各個的ではなくも総体的な方向を検討していくべきと考える。

★情報地政の神戸学



滑川 敏彦

△大阪大学名誉教授
関西ニミエメディア
ア研究会会長

「私は東京都のシステム工業のアプローチを考えて行く。君も関西の出身地でやったらどうだ。」と、日本マイコンクラブの会長としても活躍されている、渡辺茂先生に説かれたことがあります。先生が東大工学部教授を停年退官されたときのことでした。私も昭和61年4月には停年退官を迎えて出生地でもあり現住所の神戸の情報システムを考えさせられるようになっていました。

今年の夏にはテレビジョン学会雑誌の巻頭言で、私は情報地政学のすすめを提言しました。システム工学は、行政、文化、生活などの広い範囲に適用され、その評価とか最適化を考える学問です。そのなかで、地域の実情に応じた情報化システムについて考える領域が、情報地政学であると、独断と偏言で提言しました。

神戸学は、文化、生活、産業など多様な切り口を持った学際的な学問であらうし、単なる切り口ではなく、互に連係したものであらうかと考えています。情報地政神戸学とも名付けてお仲間入りをしたいものと思います。

神戸市の皆さんと共に提案をす

★多彩な「神戸学」に期待



中内 功

〈神戸ダイエー代表
取締役会長兼社長〉

すめ、今年夏には、日本では最大規模のローカル・キャンプテンが、神戸市において、運営が開始される予定の運びとなりました。西神学園都市ではCATVの実験システムが生まれました。このように神戸において育ちつつあるニューメディアに市民の皆様の暖かい御支援をお願いしたいと存じております。

私たちは五年程前から関西ニューメディア研究会を活動させています。神戸でも再度にわたり年次大会などを開催して機運を盛り上げるよう努力して来ましたが、神戸市の行政主導のニューメディア開発の調査研究にも関係してきまして、関西ニューメディア研究会としては、今後分科会活動などを、更に強化して、神戸学の一端でも担うよう連帯したいものであると私は考えさせられている次第です

★「神戸学」はものづくりとひとづくりを総合的に



嶋田 勝次

〈神戸大学建築学科
助教授〉

「神戸学」の言い出しべえのひとりとして、これからの展開の方策を思っていたら、身近かなる先生から、それは田舎者が勝手に意気だってアツピールしているだけではないのか？と言われたことがある。

これまでの神戸の開発行政や都市経営感覚から安定成長時代の方角が模索されている時、ある意味ではハードで大きなものを対象として来たところから、都市景観条例・H O P E計画地区計画制度・シンボルロード計画・都市彫刻設置などの、ソフトで細かいものの神戸における芽生えに参画して、それらが全国的動向の先駆になつて来たことを思う時、更に神戸が新しいものへの発信基地になる可能性を十分内蔵していると言えるであろう。

比較的歴史の新しい都市計画学会・都市学会・計画行政学会等に所属して、神戸学がそれらの中でもひとつの分野を形成して行く可能性を思う時、これまでとこれからの神戸の業績と役割を積み上げて、神戸らしいまちづくりの論理にまで構築されて行かなければならないと思うのである。

ユニークな土地柄や人柄を素材にしなが、個性ある豊かな都市空間が、どうすればより永続的に展開して行けるかを考える場が「神戸学」をつくるバックグラウンドであるとすれば、ものづくりとひとづくりを総合的にとらえる「神戸学」のこれからは、行政と市民とあらゆる分野からの専門家の討議が待たれるのである。

①「地方の時代」ということが言われだしてから既に久しい。それは当初、あらゆる局面での東京集中化によって達成されてきた高度経済成長の終焉を契機にした、言わば「中央」からのお仕着せの「地方の時代」論議であつたと言うことができる。その延長として、現在でも「地域活性化」や「地域振興」といったかたちでの、言わば地域開発志向の地域研究が行なわれている。しかし、その中にも新しい動向が見てとれるように思う。と言つてもそれは必ずしも研究テーマ上のことではなく、その発想あるいは視点の新鮮さである。つまり、各地域からの自発的、内発的な地域研究の動きがそれである。具体的に言えば、それまでの「東京志向の、東京との対比における、東京あつての地域」という発想からの地域研究ではなく、まずその地域の独自性の認識ということを前提にした上で、地域のアイデンティティを求めようという動きである。新しい「神戸学」もそうした動向に沿うものであると思うし、またそうあるべきだと思う。

②先般（61年12月1日）発表された国土審議会の「四全総」の中間報告は、東京を日本全体の活性化を図るための共通基盤と位置づけた上で、各地域が各々の役割分担を進めるという考え方を示している。その中で、関西圏は「国際水準の文化、学術、研究の拠点」と位置づけられている。これからいくと神戸も関西圏の中核都市の一つとして、そうした役割を「中央」から期待されているようである。

確かにこの位置づけは、今後の関西圏、そして神戸の在り方に一つの大きな枠組みを与えるものとして評価されうる。しかし私は、この枠にこだわらずに「神戸学」はもっと多様であってしかるべきであると思う。多様性こそ、新しい地域研究の特色であるべきだと考えるからである。

③そうした多様な地域研究を生産的に進めていく上で、大学の果たすべき役割は大きい。各大学は多様な研究が交流し合える場と機会を提供し、その成果を広く地域に還元する役割を担うべきであると思う。

★「空間」としての神戸学



増田 洋

△兵庫県立近代美術館次長

今の近代美術館には、二つの役割があると思います。まず第一は



「神戸学」は今年の神戸のキーワードとなるか

伝統的なものを保存、紹介するという従来の機能。もう一つは、未来の社会のあり方を模索することです。それには常識の枠にとらわれてはだめで、実験的なものもと入れていかねばなりません。そこで重要なのは、二つの要素のバランスを取るということなんです。ただ前衛的なだけでは不完全で、やはり今の常識との接点は維持しなければならぬ。その中で人々を未来へリードしていく、つまり、過去の伝統も研究した上で現在の問題を処理し、さらに未来を予測していくわけです。

そういう点では、神戸というのは非常にそれがやりやすい街だと思えます。よく「明治以前と以後の神戸はつながらない」といいますが、それは違うと思

ます。たしかに、城のような有形の歴史的モニュメントは少いですが、目に見えないものがあると思います。神戸は荘園の時代から一つの権力に支配され続けたことがないんですね。ですから民衆レベルのつながりが非常に強い。明治以後は海外の文化も入ってきたわけですが、民衆の間で摩擦が起きたという話は聞かない。これは知恵だと思えます。現実生活を構成していく知恵、そういうソフトウエアを歴史的に伝承しているわけです。言葉を換えると「空間」ですね。思考体系を再生産する空間の力、つまり神戸という空間に内蔵された遺伝子が、神戸的な風土文化、人間、あるいは思考体系を歴史の中で伝承しています。そこに神戸学の萌芽があると思います。

経済ポケット ジャーナル



★歯周病根絶を目指し、神戸で国際シンポジウム

「21世紀のデンタルサイエンス」歯周病一掃への展望」をテーマに、11月14



スライド講演も熱心に戸国際会議場において「サンスタージウム'86」

（主催サンスター株式会社）

歯周病は口腔の病気で、ムシ歯以上に深刻な疾患といわれている。その歯周病にスポットをあて、根絶のために新しい方向を探ることを目的としたもの。

シンポジウム会長のロバート・ジェンコニューヨーク州立バッファロー大学教授をはじめ内外の第一線研究者、臨床家約250名が参加し、活発な討議が展開された。中には今回公表の学

説もあり意義深いものとして大成功をおさめた。

★未来へ向って情報発進

11月1日、芦屋ラポルテ内に設立された㈱ケーブルコミュニケーション 芦屋（CCA）は情報化社会に対応するための様々な設備を整えている。



テレビカメラも最新機種2mで、テレビ画面は思え

テレビスタジオはおおよそ60㎡もの広さ、高さは4・

オ内部の空調にも特別な配慮がされており、ミキサー泣かせの雑音もない。「これだけのスタジオは、CATVとしては日本でも希です」とCCA総務渉外担当取締役中村洋助さんは胸を張る。将来は市内各所にケーブルを巡らし、市民の皆さんの幅広いニーズに応え

られるようにしたいですね。今、芦屋は大きく変わろうとしている。

★サンヨーの

新しい顔が誕生

12月1日、三洋電機と東京三洋電機の合併を機会に新しい三洋電機グループのトレードマークとして、新しいワードマークが導入された。

新ワードマークは、米国のC.I.コン

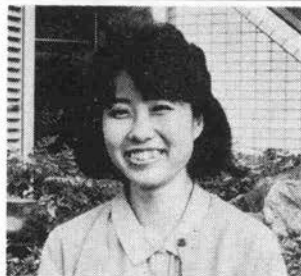
SANYO

新ワードマーク

のC.I.コンサルタント会社であるAPG社に委嘱し、創られたものであり、今後のサンヨーのC.I.活動の第一歩となる。

このワードマークは順次各部門に使われて行く予定

★KOBEOフィスレディ★



「どなたの挑戦でもお受けします」とハナからぶっそうなことを言い出したが決して格闘技などではなく、アルコールの競争の方。神戸女学院で、知る人ぞ知る山口光朝ゼミで鍛えられただけに、そこいら辺の自称酒豪では、とても太刀打ちできないほどとか。

しかし外見は、スリムでチャームिंगなお嬢さん。明朗快活で、チャットのことではへこたれない。中年男性に人気があるけれど「若い男性にももてたいな」は本音かも。笑顔素敵なA型、しし座。

＜神戸久堂書店サンバル店＞
企画室「書標」編集長

★サンバル古書のまち

オープン

サンバル5Fに12月2日から「古書のまち」がオープンした。

今まで、大阪に2カ所、古本屋の街があったが、神戸ではこれが全くの初めて8店舗が1フロアに集まり、それぞれの得意な分野の本を数多く揃えている。



明るい「古書のまち」

代表者の間島保夫さんは「本のことは、

下の階の淳久堂書店と合わせて、サンバルで何でもすませられる、という風にしたಿದೆ」と語った。

旧神戸商工会議所ビル の保存を要望する

武田 則明△建築家▽

昨年十一月二十九日の各新聞は旧商工会議所ビルを神戸市が壊し売却すると報じた。

今年は神戸港が開港して百二十年に当り思いめぐらしてみると、神戸の歴史は明治維新の開港に始まるといえる。徳川幕府が勝海舟に命じて、神戸に海軍操練所を作った。これがきっかけとなって神戸の開港が行われた。つづいて、

神戸村に居留地が開設され、国際貿易都市神戸がスタートした。この近代都市神戸のへそともいえる場所に、当時東京と大阪に次ぐ日本三大商工会議所といわれた神戸商工会議所は港と近代産業の中心として、商工都市神戸の繁栄のシンボルとして神戸商工会議所ビルを建てた。

昭和4年に建てられた旧神戸商工会議所



この土地建物は昭和四十四年商

工会議所が移転する時に神戸市へ二億円で譲渡された。神戸市は多分新しい越高層市庁舎建設資金の一部に充当する目的で民間に二十億で売却しようとしている。いま市民は歴史と文化を壊してもビフテキを食べたいのかそれ等を残して麦飯を食べるのかの選択をせまられている。私はもうこれ以上歴史や文化そして自然を壊してビフテキを食べたいとは思わない。

明治以後日本人は欧米列国に追い付け追い越せのかけ声のもとで、欧米

の技術を一生懸命吸収して来た。

大正時代になって、やっとそれ等の技術は日本人の手内に入ったと云える。すると今度は西洋のものまねではなく日本人独自の技術や様式の模索が始まった。旧神戸商工会議所ビルはこの様な時代に当時神戸高等工業学校の建築教授であった古宇田実によって設計された。柱頭に唐獅子を乗せたり、法隆寺金堂のまんじくずしの欄干や花頭窓や加古川の鶴林寺金堂の二つ供式の木組を模した。教科書の様に和風の様式を取り入れた和洋折衷のこの建物は、今日のポストモダンな考え方である現代建築の様式の反省時代によく似た思想である。この様式を選んだ当時の商工会議所の人々の進取の精神と若々しい心意気を感じられる。和洋折衷様式は屋根に瓦を乗せた建物スタイルの軍国調ともいえる帝冠様式に移って行くのだが、このビルは未だ大正デモクラシーの自由活潑な柔軟な精神を表現している建築だ。まさに現代神戸人のオーソドックスでクラシカルだが常に新しいものを積極的に取り組む氣質をシンボリックに表現していると云える。この建築を壊してはならない。

(★神戸市は義勇海運に十月十五日売却)義勇海運に保存要望を「神戸の建築を考える会」「神戸港を考える会」などでお願ひして行きたい。



小山乃里子の
華麗なる男のインタビュー

■第25回■

淀川 長治／映画評論家▽

今でも僕はやっぱり
神戸の人間やね

日本で初めて映画が上映されて90年。開港120年を迎える今年、いよいよメリケンパークに映画発祥の地の記念碑も完成。今日は、神戸が生んだ日本を代表する映画評論家の淀川長治さんに、神戸にお住いの頃の珍しいお話を伺いました。

★兵庫、新開地、僕の故郷やなあ。

ノコ 東京生活はもうずい分になられましたか？

淀川 30歳まで神戸で、今が77歳だからね。47年が東京だけど、絶対、神戸の方がまだ9割だね。東京の人間にまだなれない。不思議だね。だから30歳までの年代というのは、一生つくね。日曜洋画劇場のしゃべり方も神戸だね。最初、東京のお行儀がいろいろあった。

ノコ そんなに東京はお行儀いいですか。いろんな人が集まっているでしょ。

淀川 侍の街だからね。神戸はやっぱり商売人の街。

ノコ 神戸で印象に残ってることは何ですか？

淀川 子供の頃の事は、よく記憶に残っているんだね。

その頃は兵庫の港があって、僕のお父さんは、兵庫の港から船で大阪に芝居を観に行ってたの。

ノコ 船で？！

淀川 そうよ、神戸の人はみんなお重持って行ってたのノコ 大阪へねえ。

淀川 そう。8時頃、大阪に着いて、通しだから9時半

頃から芝居があるの。お昼は道頓堀へ食べに行ってたね。

そやから兵庫の港はにぎやかだったの。高い建物があったから、港から船に乗って行くときは、能福寺の大仏さんが見えるの。それがまたいいのよ。いかにも東洋らしいんだね。夕陽の中で鐘が「ガーン」と鳴って、「ああ、いいなあ」って。ジャパニーズサンセットよ。いかにもオリエンタルで、版画みたいでしょ。大仏つあんは僕の幼稚園やったからなあ（笑）。家から二銭持って行って、どら焼きにアンコ入れてもらって。

ノコ やっぱアンコ入ってるんですか。

淀川 うん。「おばはん、アンコもつと入れてんか」言うの（笑）。何でもあったなあ。

ノコ 常にそういうお店が大仏さんの周りにあった。

淀川 あるんよね、アーケードみたいに。その突きあたりに大仏さんがあって、その短い階段の手すりをシューッと滑ってね（笑）。大仏さん、新開地、どっちもが僕の故郷やなあ。僕の家が兵庫の港でやってた一膳飯屋を「淀川屋」といったのは、大阪へ行く船がみんな淀川に着いたからなの。「樽井」っていう名前だったけど、提灯が「淀川」だったから、みんな「淀川はん、淀川はん」言ってる、淀川になったの。

ノコ あーなるほど、へえ。
淀川 昔は兵庫が文化の源やった。そこで生まれ育った



あんなにきれい歩く芸者を持ったポッペン

から、やっぱり懐しいなあ。あんた、どこでんの、生れは
ノコ 北海道です。

淀川 まあ、すごい雪。北海道のどの辺。

ノコ 小樽です。

淀川 小樽、ニオイするよ(笑) 開拓精神がある。

ノコ (笑) 港っていいっても、ニシン漁のもう荒らくれた港ですね。

淀川 わかるよ。港はやっぱり似てるね。

ノコ 神戸と似てますよ。坂道があって、坂を下りていくと港があつて。

淀川 そうね。港という所は、外からの文化が入ってくるから。

ノコ そうでしょう。小樽は北海道で一番でしたよ。

淀川 元気だね(笑)。

★神戸のお正月は粋だった。

淀川 僕が神戸に居た頃は、オリエンタルホテルは、5段ほどの階段を上がつて、回転ドアを開けるの。そして、真正面に黒光りした大きな鉄の燈籠があつてね、上

にちよつとだけ金の房がついてるのね。それがオリエンタル、東洋という感じなの。西洋人が自動車で上がつてきて見て「オーワンダフル」よ。

ノコ 私なんか神戸へ来て20年ですが「ニューオータニ」「みたいな固有名詞としてしか「オリエンタル」を覚えていないんですね。だけど、いわゆる「東洋」なんですね。今、初めてわかりました。

淀川 そう。トアホテルの方は、初めっから西洋くさいホテルだったの。ロビーの椅子も、みんな藤の椅子だったの。それで、おじいちゃん、おばあちゃんがじっと居るの。入った所に大きな樅ノ木があつて、クリスマスには生のリンゴがいっぱい吊つてあるのね。

ノコ 生のリンゴが?!

淀川 そう。それで蠟燭だけなの。だから綺麗で静か。クワレットだけの音楽でね。オリエンタルは、金の玉銀の玉いっぱい飾つて、ジャズ。若い人がいっぱい。

ノコ へえ、ジャズですか。

淀川 お客さんが踊っていた。オリエンタルはアメリカ

ンスタイル、トーアはヨーロッパスタイル。僕のうちはオリエンタルが好きだったの(笑)。そんなんだから、オリエンタルという名前が、横浜のニューグランドと同じように懐しいなあ。元町は、入り口に三星堂があった、そこへ行って一番嬉しいことは、注文したら必ずレモンが切って側に置いてあったの。"いいなあ"と思った。銀のポットも置いてあって、何杯でも飲めたの。ノコへえ、その頃から。

淀川 銀の盆でポットも砂糖壺も持って来て、それが嬉しいの。

ノコ 昔の方がハイカラやなあ。今でも、ときどき神戸



やっぱり神戸はいいなあ

にお帰りになって、ずっとこのまんまやなあ、と思われ店、ありますか。

淀川 もうなくなつたなあ。ただね、トアロードへ行く道の裏側にね、"ポッペン"売ってるの。ポッペン知ってる？ ペコペコ言うぶんね。あれなんか懐しいなあ。今東京には絶対ないから。

ノコ 今、ポッペン売ってます？

淀川 行ったら、ウィンドウに立てかけてあったから、"ウワァー" 思ったのよ。神戸のお正月いうたら、ポッペンとドンパンで夜が明けたから。

ノコ 今、ドンパンはありますよ、六甲あたりでね(笑)

淀川 怖いね。僕の子供の頃は、12月の27、28日頃からお飾りして、31日の晩は表に水まいてそれぞれの家の紋の入った幕を張ってたね。シーンとしたの。

ノコ 何してたんですか、家の中で。

淀川 いくら小銭はいとるか、思ってた(笑)。あの時は夜明けとともに電気がパツとついて "おめでとうさん" ウチは芸者衆が居たから、電気つく前にガスの灯つけるの。

で、両側の隅に蠟燭つけたガラスのフロアーランプを置いて、そこへ10人ぐらいの芸者さんが裾ひいて "おめでとうはん" 言うて来たら、さすがにきれいやったなあ。それで始まるんやね。

表に出たら、ポッペン、ポッペン、ポッペン言って、ドンパンがパン、パンと鳴って学校に行つて唄うの。

"年の初めの..." 歌って、帰りに "松竹ひっくり返して大騒ぎ" っって歌って大喜びして帰ってきてから、活動写真館に行った。

ノコ それは、私とあまり変わってまへんな(笑)

淀川 芸者衆は長田神社にみんな人力車でお参りに行くの。きれいな紋付で、幌開けて行くわけ。元旦で、朝早いでしょ。だから絹のベール着けるの。若い子はピンク年増は鼠色。いい年増は紫色のベール。きれいやつたよ。帰りに、みんなポッペン買って帰ってくるのが形式なの。それも一流の芸者は、すごく大きなポッペンを斜めに持って帰ってくるのが粋なの。売れへん芸者は小っちゃなポッペンでね。

それが正月風景やった。きれいなもんでしたよ。羽子板じゃなくて、ポッペンを持ったのねそれを持って帰って床の間に並べるの。一つずつに名前が書いてあつてね。次の正月にそれを長田神社に返しに行つて、新しいのを買ってくる。正月のシンボルやったね。あれが好きやったねえ。

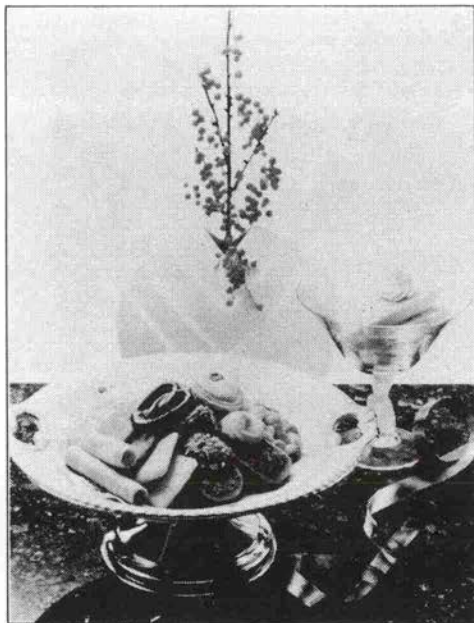
ノコの一言 ほんとに、歩く字引みたいな人である。神戸の昔話、ようこ

Juchheim's
Die große und kleine Feinschmecker
Küche Frankfurt am Main
Seit 1881

謹賀新年

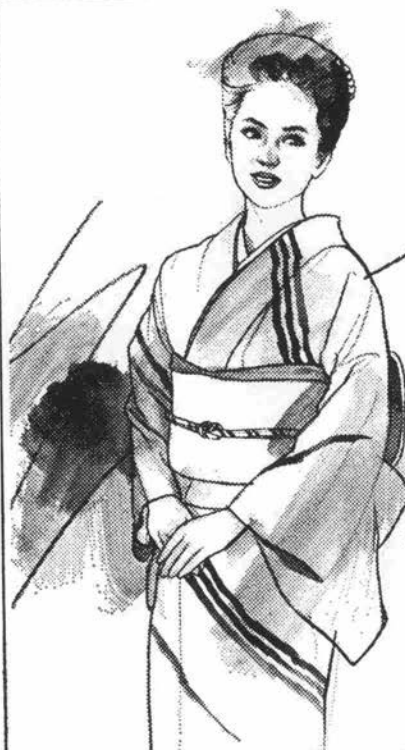
Ein gutes Neues Jahr!

1987'



ユ-ハイム

拝啓
着物美人殿



1987年 本年もよろしくお願い申し上げます。

絹は、火、水、汚れをとてもらいます。着物を着た一瞬からあなたは着物の保護者としての自覚が必要です。ストーブやタバコの火に注意する。雨に出会う前に雨コートを着用する、雨やどりする。そして泥ハネしそうところへは近づかない。お食事やお茶を飲む時はヒザにハンカチを広げる。そうした思いやりがあなたを、よりしとやかな着物美人にひきたてます。

Since 1933
ニシジマ
Fashion

本社 / 神戸市灘区記田町1丁目2-16
078-851-2440

■大阪支社/06-853-1332 ■つかしん店/06-420-3754 ■ローブ・ニシジマ/078-332-2440
■山手店/078-221-2440 ■宝塚店/0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル/078-221-9110